

2021.12. 11 村上春樹『ニューヨーク炭鉱の悲劇』第1回討論のまとめと予告

○参加者

【Zoom】佐野之人、田中克典、唐露、鹿安冉、奈原伸雄、(司会：村上林造)

【西田旧宅】本田佳子、行武 要、岡部昌平

■第1回論題：作品内容とニューヨーク炭鉱の悲劇は、どう関わるのか

- ①「ニューヨーク炭鉱の悲劇」という題名と結末の場面はつながっているようだ。
- ②ニューヨーク炭鉱に閉じ込められ、残りの空気が少ない状況と、若者を死に向かわせる社会的状況が重なる。パーティの場面の女の「殺人」は何を意味しているのか？
- ③パーティ場面の女は自分自身を殺したのではないか。
- ④女が僕を紹介してもらったのは、五年前の彼女と今の僕が(28歳で)似ていると思ったからではないか。
- ⑤最後の炭鉱内の場面の「音」(五秒おきに天井から落ちてくる水滴の音、つるはしの音、生命の音)とパーティ場面の「音」(その音はものすごく遠くの方から、でも恐ろしいくらい鮮明に聞こえてきた)は関連していると思う。
- ⑥最初と最後にだけ出て来る炭鉱場面は、「結局のところ、死は死でしかない」「...黒い煙は、...黒い煙でしかない」と関連していると思う。
- ⑦若者たちは非現実と現実の矛盾の中で苦しんでいる。予期せぬ殺戮が始まったとは、現実と非現実の矛盾の表現である。僕の友人は非現実的で非日常的な死や災難をいかに迎えるかという準備をしている。喪服を準備し、夜掃除をし、ガールフレンドを半年ごとに取り換えるのは、すべて死の迎え方、準備。
- ⑧友達が次々と死んでいくのに対し、僕自身の死には現実感はない(自分がいつ死ぬか考えておらず、死なないつもりでいる)。なんとなく生きていけるという思いと実際に降りかかってきた非日常的な死の矛盾。他方、友達は死は死でしかないという達観をもちながら、死の準備をしている。
- ⑨「年嵩の工夫」は、少子高齢化社会で社会に迷惑をかけない生き方を志向する高齢者であり、建設的な未来を描くことの困難さの中で生きる若者のストイックな姿勢を描く。
- ⑩主人公がビールを飲むことと、彼女を押しつぶしたのがビール運搬トラックであることの暗合。自殺した友達が死ぬ前にウィスキーを飲み、僕はスーツを貸してくれた友人と一緒にウィスキーを飲む。その友達は自分の死の準備をしており、次に死ぬのは彼であろう。ガールフレンドからの長電話を切ってシャンパンを開け、次の電話を無視した彼は、ガールフレンドとうまくいかなかったのかもしれない、死んでもいい理由がいっぱいある。
- ⑪スーツを貸してくれた友人自身が葬式に行かないのはなぜか。「バルザック全集」を持っているのはなぜか？ 友達と僕は二人でなく、一人の人間でもいいのかもしれない。
- ⑫台風の時の動物園に行く友人は、死を前にしたときの一般的な人のあり方だろう。また、「できるだけ息をするんじゃない」とは、理想的な死を前にした人のありかたと思う。

■第2回論題：

○3人の登場人物（語り手「僕」、背広を貸してくれる「友人」、パーティーの「女」）について。

これら3人の相互関係、とりわけ「僕」と「友人」、「僕」と「女」の関係をどう理解すべきか？

○これら3人を通して「人間にとっての死の意味」がどのように描かれているのか？

■西田文学読書会 今後の予定

12月11日（土）13：45～（第6回）13：45～「ニューヨーク炭鉱の悲劇」第1回討論

1月15日（土）13：45～（第7回）13：45～「ニューヨーク炭鉱の悲劇」第2回討論

1月29日（土）「ニューヨーク炭鉱の悲劇」レポート締切

後、「ニューヨーク炭鉱の悲劇」レポート集を西田読書会HPに掲載